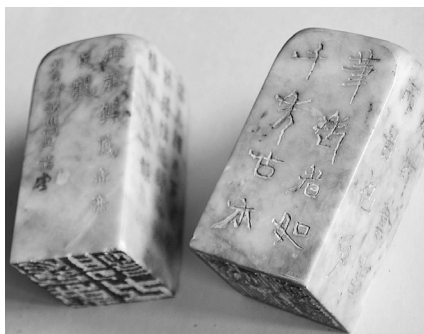


資料渉猟余話

その87

このコラム86に「生没不詳」？とし、大橋浩堂を取り上げた。その後、彼の手紙や数点の陶器作品、自ら彫った雅印にも出会った。



東京赤坂時代の雅印「東都水川 祠畔 浩堂」の銘が読み取れる



雅印にも出会った。

大橋浩堂、その後

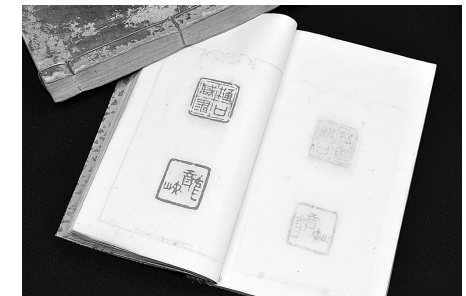
嶋 不 濁

息子昇堂が所持していた「浩堂」の大雅印は「浩堂刀」と銘が刻まれていた。面白かったのは、側面には「東都水川 祠畔」とあるので、東京赤坂時代のもの

らしい。また小さな印譜に「樋口蔵書」「龍峽」があったこと。龍峽は日夏耿之介の叔父で、彼の印も浩堂がつくったものと思うと、急に親近感がわいた。作品は、いずれも力のあるものであったが、前稿で書いた以上の事実がわかったわけではなかった。



古印体原稿と印譜



「古印体原稿（自筆 明治四十年）」と表題が内側に書かれた篆書のテキストのようである。個人的話をつかかった。

しかし前稿が「南信州」紙に掲載されると、龍江の保寿寺にも書額があるという情報もたらされたので、さっそく参上して早苗住職にお話をうかがった。

「浩」が寺にあったか覚えていないし、「浩」新聞で大橋浩堂の郡呉服町三十番地」

「浩」が寺にあったか覚えていないし、「浩」新聞で大橋浩堂の郡呉服町三十番地」